

ウイルソン病のマス・スクリーニングに関する研究
(分担研究：効果的なマススクリーニングの施策に関する研究)

高橋 勉*、佐藤隆之*、高田五郎*

要約：秋田県内8カ所の一般病院小児科を窓口としたウイルソン病マス・スクリーニングを試みた。方法は対象を7ヵ月より6才までの乳幼児とし、ろ紙血ホロセルロプラスミン値を測定した。今回、対象数は1019名で、平均値は12.18 mg/dl、陽性者はなかった。

小児科外来にポスターおよびパンフレットを準備したが、検査を希望する対象はほとんどなく、医師の勧めで他の検査と一緒にを行うものがほとんどであった。小児科医は忙しい業務と同時に説明などを行うので負担が大きかった。これに関しては何らかの方法で被検者が自主的に受診する形式になれば十分軽減されると思われた。採血・検体回収・測定まで2週間を目標としたが、検査数にむらがあるなどの問題でかなり長期化した。しかし心配された測定値の低下傾向は認められなかった。

見出し語：ウイルソン病、マス・スクリーニング、乳幼児

対象および方法：秋田県内の8カ所の総合病院の小児科外来に、ウイルソン病の説明とマス・スクリーニングに関するポスターとパンフレットを設置した（全国ウイルソン病友の会より提供）。希望者あるいは医師の勧めに対し同意書を得た生後7ヵ月から6才までの乳幼児で血清セルロプラスミン値に影響を与える急性・慢性疾患を有しないものを対象とし、ろ紙採血を行いホロセルロプラスミンを測

定した。ろ紙血は測定まで冷凍庫に保存され、2週間以内に測定された。

結果：対象数は1019名。セルロプラスミン値は12.18 (SD 3.71) mg/dlで、最小値2.10 mg/dlであった（図1）。陽性例は1例で精査の結果、ネフローゼ症候群で低セルロプラスミン血症を呈していたことが判明した。セルロプラスミン値は対象年齢に対して一定の値を示した（図2）。採血から測定までは2週間を目標としたが、平均約3週間であった。しかしこの期間の長期化に伴う測定値の低下傾向は認められなかった（図3）。

*秋田大学小児科

図1 乳幼児におけるろ紙血ホロセルプラスミン測定

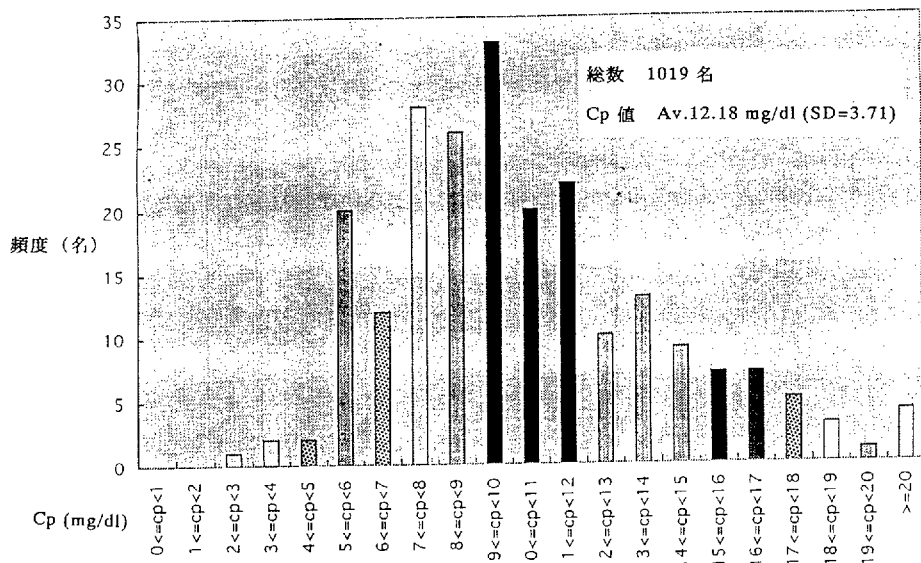


図2 乳幼児におけるろ紙血ホロセルプラスミン測定（年齢分布）

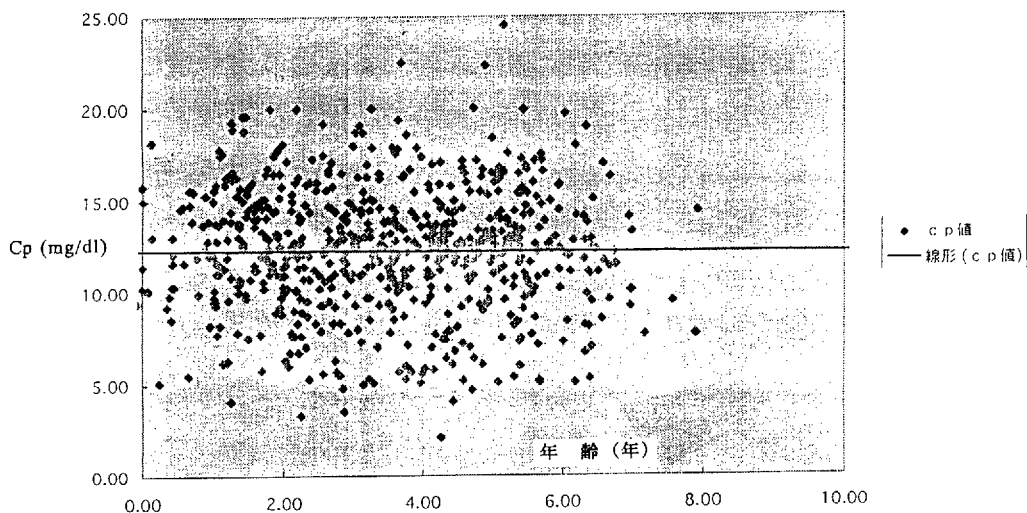
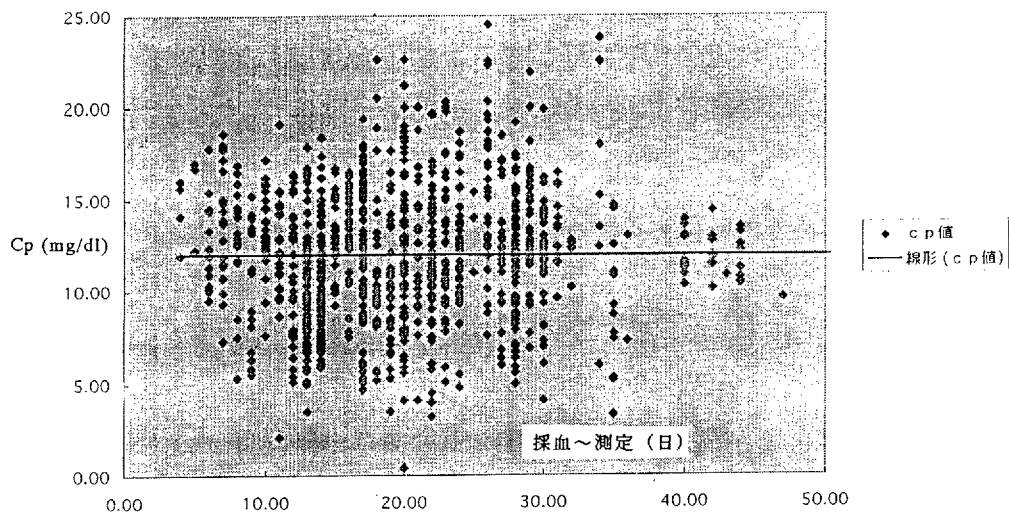


図3 乳幼児におけるろ紙血ホロセルプラスミン測定（測定までの期間）



考察：ウイルソン病に関して現在、新生児期マス・スクリーニングが試みられているが、患者は発見されていない。さらに、幼児期に発見されたウイルソン病患者の新生児のろ紙血のセルロプラスミン値を測定すると有意な低値を示していなかったとの報告がされている。以上より7ヵ月から6才までの乳幼児を対象とし、一般小児科外来を窓口としたマス・スクリーニングを行った。小児科外来にポスターおよびパンフレットを準備したが、検査を希望する対象はほとんどなく、医師の勧めで他の検査と一緒に行うものがほとんどであった。小児科医は忙しい業務と同時に説明などを行うので負担が大きかった。これに関しては何らかの方法で被検者が自主的に受診する形式になれば十分軽減されると思われた。採血・検体回収・測定まで2週間を目標としたが、検査数にむらがあるなどの問題でかなり長期化した。しかし心配された測定値の低下傾向は認められなかった。

文献：青木継稔ら、Wilson 病 小児内科 Vol. 28 増刊号



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:秋田県内 8 カ所の一般病院小児科を窓口としたウイルソン病マス・スクリーニングを試みた。方法は対象を 7 ヶ月より 6 才までの乳幼児とし、ろ紙血ホロセルロプラスミン値を測定した。今回、対象数は 1019 名で、平均値は 12.18mg/dl、陽性者はなかった。

小児科外来にポスターおよびパンフレットを準備したが、検査を希望する対象はほとんどなく、医師の勧めで他の検査と一緒に行うものがほとんどであった。小児科医は忙しい業務と同時に説明などを行うので負担が大きかった。これに関しては何らかの方法で被検者が自主的に受診する形式になれば十分軽減されると思われた。採血・検体回収・測定まで 2 週間を目標としたが、検査数にむらがあるなどの問題でかなり長期化した。しかし心配された測定値の低下傾向は認められなかった。